

様式 1

研 修 (研 究) 報 告 書

平成 30 年 3 月 30 日

玉名市議会

議 長 中尾 嘉男 様

氏 名 江田 計司



下記のとおり、参加（開催）しましたので報告します。

参加議員	江田 計司		
日 時	平成30年2月15日（木）～平成 年 月 日（ ） 午後2時00分 ～ 午後5時00分		
場 所	東京都八重洲 カンファレンスセンター	参加者数	約36名
研修(研究)事項	不登校支援における行政支援と民間支援の相違点		
概要及び所見	講師 家庭教育支援センターペアレンツキャンプ [REDACTED] 氏 概要及び所見については別紙のとおり		

○不登校とは

何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため、年間30日以上欠席した者のうち、病気、経済的な理由による者を除いたもの。この後、文科省は平成17年に省令によりこの定義づけに関する留意事項を定める。

留意事項の内容

- ・あくまでも30日という数字は参考とする基準
- ・不登校かどうかの判断は現場に任せる
- ・基準に合致していないタイプの不登校も認める

○不登校になるきっかけはそれぞれ。

不登校の数だけ原因があり、解決法がある。

民間支援と行政支援は共に不登校の生徒に対して何ができるかを考えるのは同じ。しかし、それぞれの立場の違いにより、積極的に関わる支援とリスクを重視し見守る支援とに分かれているのが現状かもしれない。

○不登校支援における民間支援と行政支援の相違点

(行政支援)《基本無料》

- 1) 登校刺激に関しては消極的
 - ・見守る支援
- 2) 来談者中心療法が中心
 - ・問題解決の答えはクライアントの内面にある=時間がかかる
 - ・アドバイスが抽象的。「心を抱きしめる」「愛情深く」など
- 3) 欠席扱いにならないシステムを提案する
 - ・適応指導教室や保健室登校の促し。欠席の裁量は学校にある
- 4) 医療関連機関へのリファー
 - ・グレーゾーンの多い精神医療の世界の問題

(民間支援)《基本有料》

- 1) 多種多様な支援があり親子ニーズに応える
 - ・相談?アドバイス?問題解決?
 - ・復学?居場所づくり?学習支援?山村留学?
 - ・親が学びたい?子どもが学びたい?
 - ・アドバイスが具体的
- 2) 福祉的手法と教育的手法を複合させられる
 - ・来談型、訪問型など形に縛られない
- 3) 基本有料なので、親の経済的負担等が多い

○不登校支援における民間支援と行政支援の相違点

(行政支援)

スクールカウンセラー：臨床心理の専門家が別室などでカウンセリングを行う。

スクールソーシャルワーカー：福祉の専門家である SSW が学校や家庭の問題に対する支援を行う

教育支援センター：教育委員会が運営。不登校の子どもを対象にした施設で学習支援等を行う

(民間支援)

医療機関：診療内科、精神科等で症状にあった治療行為を行う

ホームスクーリング：自宅で親や家庭教師が勉強を教える。近年は ICT を用いたカリキュラムを提供する形態もある

山村留学：親元を離れて山村で学ぶ。センター方式や里親方式等の形態がある

フリースクール：学校のように授業や集団生活を行う民間施設。居場所として強調したフリースペースという形態もある

復学支援：学校への復学を目指した支援を行う。訪問型、来談型など様々なスタイルがある

○積極的に関わる支援とは

1) 見守る支援と積極的に関わる支援の比較

(見守る支援)

- ・待ち
- ・ゴール設定をしない
- ・対象に無理をさせない
- ・目標が多様化
- ・無理しなくていい
- ・目の前のかawaiiそう
- ・心理学的サポート
- ・本人の意思次第
- ・広く浅くすべての人に出来る支援
- ・リスクを負わない

⇔

(積極的に関わる支援)

- ・働きかけ
- ・ゴール設定をする
- ・対象に乗り越えさせる
- ・目標が明確
- ・できることを探す
- ・将来的なかawaiiそう
- ・教育的サポート
- ・環境的なアプローチ
- ・ターゲットを絞った支援
- ・リスクを負う

2) 民間の支援機関 ペアレンツキャンプの概要

ペアレンツキャンプは訪問カウンセリングの手法を用いた復学支援と通信添削型の家庭教育支援を行っている支援機関。

～ペアレンツキャンプのコンセプト～

「親が学べば子が伸びる、親が変われば子も変わる」

～ペアレンツキャンプの支援手法の特徴～

- ・家庭教育支援と訪問カウンセリングを組み合わせることで不登校の子どもの復学率が95%超え
- ・クラウドを用いた通信添削型の家庭ノートチェック法でいつでも、どこでも支援が受けられる
- ・自立や社会性を家庭で学ぶPCM（親のカウンセリングマインド）を学ぶことで子どもの問題行動を未然予防

3) 不登校の支援では子どもへの対応だけでは継続登校を目指すのは難しい。いずれ支援者が離れたときに子どもを支える存在がいなくなること、子ども自身支えがなくても学校環境に適応できる力が身につけていなければ不登校は再発する。

家庭そのものが支援に依存せず、問題が起きても家庭だけで乗り越えられるような家庭力をみにつけてもらうことがゴール。

4) 積極的に関わる支援の特徴

- ① 家庭ノートチェック法で親を支える。家庭での親と子のコミュニケーションを記録し、専門家による分析や具体的なアドバイスを受け日々の子育ての実践の中で家庭内の対応法を学ぶことができる手法
- ② ペアレンツキャンプの復学支援は家庭の力で問題を乗り越えられる様になるまであらゆるサポートをして寄り添い、成長を見届ける訪問カウンセリングと家庭教育支援を組み合わせているのが支援の特徴

最後に現場の支援者が議員に伝えたい不登校の真実とは、支援を受けられた親御さんが口を揃えて言うのは、もっと早くに家庭教育を学べばよかった。支援者として感じているのはもっと早くに相談してくれればここまで深刻化していなかった。不登校支援の現場では本人に適さない支援を行うことにより本来病気でなかった子が病気になったり、不登校から家庭内暴力などに発展するケースも見受けられる。

いじめなどによる問題では本人の精神的なケアを十分に行うことが真っ先に求められ本人が動き出すのを見守ることが必要なケースもある。反対に見守るだけでは不登校や家庭内での課題が深刻化しているケースもある。大切なのはそれぞれのケースに適した支援の見極めが必要ではないか。

本日のセミナーは、不登校支援と家庭教育支援の現場で活躍する支援者から議員に向けての問題提起というテーマで、不登校支援における行政支援と民間支援の相違点や不登校の未然予防という観点から、親支援の充実を目指すことに

より、不登校やひきこもりの減少が期待される親支援の充実を目指すという社会投資は自治体に大きなベネフィットをもたらす本日のセミナー内容が議員活動で一人でも多くの不登校の子どもたちの明るい未来につながる様にと感じた。